

平成 29 年度 全国私立中学高等学校
私立学校特別研修会
外国語（英語）教育改革特別部会
【東京エリア】
実施報告

一般財団法人私学研修福祉会 主催
一般財団法人日本私学教育研究所・上智大学言語教育研究センター 協力
日本私立中学高等学校連合会 後援

小学校・中学校・高等学校等を通じた英語教育改革を進める文部科学省では、平成 26 年度より英語教員の英語力・指導力強化を図る観点から、英語指導力向上事業「英語教育推進リーダー中央研修」を外部専門機関に委託し実施しています。同研修は、全国の国・公・私立学校の英語教員を対象にしているものの、公立学校を中心とした研修の仕組みになっていたことから、私学関係者の要望に応じて、文部科学省は平成 27 年度より私立学校教員が参加しやすいよう受入体制を整備し、私立学校教員も参加できるようになりました。

しかし同時に、次期学習指導要領や大学入学者選抜改革を含めて国が進める英語教育改革に係る最新の情報が、私立学校には十分に伝わっていない実情もあり、私立学校教員は公立学校教員に比べ情報量が少ない故に埒外に置かれた感は否めません。

については、私立学校においても、外国語(英語)教員の外国語(英語)力・指導力強化を図るためには、教員が 21 世紀型教育に相応しい最新の教授法と情報を早急に取り入れる必要があることから、当研究所では、平成 27 年度より専門家の指導による特別研修「外国語(英語)教育改革特別部会」を実施しており、平成 29 年度も引き続き、専門家の指導に上記の「英語教育推進リーダー中央研修」受講者の指導によるワークショップを加えて、研修を実施することとしました。

◆ 会 期 ◆ 平成 29 年 5 月 13 日 (土)

◆ 会 場 ◆ [上智大学四谷キャンパス](#)
東京都千代田区紀尾井町 7-1 (JR・東京メトロ四ツ谷駅徒歩 5 分)

◆ 参加者数 ◆ 59 名

◆ プログラム ◆

① 講演 演題 『新学習指導要領で求められるこれからの英語教育』
講師 吉田 研作 上智大学特別招聘教授・言語教育研究センター長

② 講演 演題 『主体的・対話的で深い学びを実現する英語授業』
講師 藤田 保 上智大学言語教育研究センター 教授・副センター長

③ ワークショップ

英語で授業のヒント Teaching English in English

指導 文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」受講者

(1) vocabulary

(2) classroom English

※ワークショップ後に文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」受講者と参加者で情報交換を行います。

◆ 日程概要 ◆

時刻	09 30	10 00	10 15	11	12 45	13 45	14	15 30	16	17 45	17 00
5 月 13 日 (土)		受付	開 会 式	① 講演	昼食		② 講演		③ ワークショップ		閉 会 式

※プログラムの内容等は変更となる場合があります。

◆ 日 程 表 ◆
5月13日(土)

〔会場 上智大学四谷キャンパス〕
全体会：2号館17階1702会議室
ワークショップ：2号館402/406/408/409

09:30	
	受 付
10:00	<p>◇ 開会式</p> <p style="text-align: right;">司会 川本芳久 (一財)日本私学教育研究所 事務局長</p> <p>1. 開式 2. 挨拶 一般財団法人日本私学教育研究所 理事長 吉田 晋 上智大学 特別招聘教授・言語教育研究センター長 吉田 研作 3. 日程説明 一般財団法人日本私学教育研究所 主任研究員 山崎 吉朗 4. 閉式</p>
10:15	<p>◇ 講演</p> <p style="text-align: right;">司会及び講師紹介 外国語(英語)教育改革特別委員</p> <p>演題 「新学習指導要領で求められるこれからの英語教育」 講師 上智大学 特別招聘教授・言語教育研究センター長 吉田 研作</p>
11:45	昼 食
12:45	※昼食は各自でおとり下さい(5階学生食堂等が利用できます)。会場内で食事はできません。
12:45	<p>◇ 講演</p> <p style="text-align: right;">司会及び講師紹介 外国語(英語)教育改革特別委員</p> <p>演題 「主体的・対話的で深い学びを実現する英語授業」 講師 上智大学 言語教育研究センター 教授・副センター長 藤田 保</p>
14:15	
14:30	<p>◇ ワークショップ</p> <p style="text-align: right;">司会及び発表者紹介 外国語(英語)教育改革特別委員</p> <p>英語で授業のヒント Teaching English in English (1) vocabulary (2) classroom English</p> <p>指導 普連土学園中学高等学校 教頭 浜野 能男 聖光学院中学高等学校 教諭 國嶋 応輔 実践学園中学高等学校 教諭 松本 朋之 啓明学園高等学校 教諭 木幡 朝子 日南学園高等学校 教諭 黒木 大貴</p>
16:45	<p>◇ 閉会式</p> <p style="text-align: right;">司会 川本芳久</p> <p>1. 開式 2. 総括 (一財)日本私学教育研究所 主任研究員 山崎 吉朗 3. 閉式</p>
17:00	解 散

※ プログラムの内容等は変更となる場合があります。

※ 無色の飲料ペットボトル(水)は、会場内に持込みできますが、コーヒー等色付きの飲料・蓋のない容器の持込みはできません。

◆ 講師プロフィール ◆

吉田研作氏

上智大学特別招聘教授、言語教育研究センター長。上智大学大学院、アメリカ・ミシガン大学大学院修了。専門は、応用言語学。J-SHINE 会長。文部科学省「英語教育の在り方に関する有識者会議」座長、「外国語能力の向上に関する検討会」座長、「外国語教育における『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標・設定に関する検討会議」座長、「英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会」委員・「同協議会作業部会」主査などを歴任。今年からは「高大接続システム改革会議」委員、中央教育審議会「教育課程企画特別部会」委員などを務めている。近年では、日中韓 3 カ国の高校生の英語力比較や、教師の教授法比較などについての研究にも力を入れている。「起きてから寝るまで英語表現 700」シリーズや「小学校英語指導プラン完全ガイド」（ともにアルク）などの監修を務めるほか、著書多数。

藤田 保氏

上智大学外国語学部比較文化学科（現、国際教養学部）卒業。同大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了。専門は応用言語学（バイリンガリズム）と外国語教育。立教大学異文化コミュニケーション学部教授等を経て、現在、上智大学言語教育研究センター教授、副センター長。特定非営利活動法人小学校英語指導者認定協議会（J-SHINE）理事。公益財団法人日本英語検定協会理事。主な著書に『コミュニケーション型英語教育を考える』、『英語教師のためのワークブック』（ともにアルク）、『21 年度から取り組む小学校英語』（教育開発研究所）などがある。

◆ 講師・発表者・指導員（順不同） ◆

吉田 研作	上智大学 特別招聘教授・言語教育研究センター長
藤田 保	上智大学 言語教育研究センター 教授・副センター長
浜野 能男	普連土学園中学高等学校 教頭
國嶋 心輔	聖光学院中学高等学校 教諭
松本 朋之	実践学園中学高等学校 教諭
木幡 朝子	啓明学園高等学校 教諭
黒木 大貴	日南学園高等学校 教諭
吉田 晋	富士見丘中学高等学校 理事長・校長
平方 邦行	工学院大学附属中学高等学校 校長
中川 武夫	蒲田女子高等学校 顧問

◆ 特別委員・指導員（順不同） ◆

平方 邦行	工学院大学附属中学高等学校 校長
浜野 能男	普連土学園中学高等学校 教頭
田中 歩	工学院大学附属中学高等学校 教諭
原田 貴之	愛知中学高等学校 教諭
黒木 大貴	日南学園高等学校 教諭
川本 芳久	一般財団法人日本私学教育研究所 事務局長
山崎 吉朗	一般財団法人日本私学教育研究所 主任研究員

私立学校特別研修会外国語（英語）教育改革特別部会【東京エリア】 実施内容概要

5月13日（土）に上智大学を会場に開催した。参加者は59名。吉田研作・上智大学特別招聘教授・言語教育研究センター長、藤田保・上智大学言語教育研究センター教授・副センター長による講演と文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」平成28年度受講者によるワークショップが行われた。大学入試センター試験に代わる「大学入学共通テスト（仮称）」の概要発表が直前に控える時期の開催ということもあり、参加者の関心は非常に高く、アンケートの回収率95%という数字が示すように、満足度の高い研修会であった。

開会式

開会式では、平方邦行・当研究所副理事長・外国語（英語）教育改革特別委員長は吉田研作・上智大学言語教育センター長、藤田保・同副センター長、並びに上智言語教育センターに感謝するとともに以下の様に挨拶した。

新学習指導要領に向けて文科省をはじめとする関係団体の中で議論が進んでいる。4技能を使った入試が多くの大学で行われつつあるが、その中でも外部の試験（TOEFL等）を大学の試験で利用できるような変化している。各試験とも内容が進化しており、また大学によって採用している試験が異なるため、どの試験に特化して指導していくかの判断等、英語の先生方が考える事は沢山ある。一方で、国際社会での通用性を重要視し、4、5年前より文科省でも様々な大学教育改革を進めてきたことは事実だが、その実態は先に進んでいないというのが現状である。4、5年前に作られたシナリオを着地させなければならず、私立学校の先進性・独自性を打ち出しながら改革を進めていくために、特に英語の先生方が関わる仕事が沢山あると思うので、本日の研修会を有意義な時間としてほしい。



続いて、吉田研作・上智大学特別招聘教授・言語教育研究センター長が挨拶した。

日本の英語教育が新たな出発を遂げようとしている。戦後最も大きな改革となるだろう。最も大きな改革となる理由としては、小学校から英語が教科として導入されることも一つだが、やはり大学入試の変化が挙げられる。詳しくは後の講演で述べるが、大学入試が変わらないと、その下はなかなか変わらないということが分かる。我々は教員の英語教育に対する意識調査を行い、10年前は「積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢の育成が大事である」という意識が強かったが、現在はもっと「現実的に何を教えたらいのか」という問題意識を持っている。国際社会においての共通語として英語をとらえ、「実際に英語を使えることが大事である」という認識が高まっていると調査報告書から窺える。そうした変化が大学入試の変化にも反映されていると考えている。

新しい時代を迎える英語教育であるが、課題もあるので是非この研修会で一緒に考え、有効に使ってほしい。

講演 1

『新学習指導要領で求められるこれからの英語教育』と題した吉田研作・上智大学特別招聘教授・言語教育センター長の講演により、研修会のプログラムが開始された。



1. 日本人の英語力

昨年のTOEFL iBTアジアの結果 平均点71点、30か国で下から4番目であった。特に弱いのはスピーキング（過去3年間変わっていない）。

2. ベネッセの意識調査

アンケートでは英語が必要ないと思っている中学生の数は少なく、「英語が話せたらカッコいい」「就職に役立つ」という項目の割合は高い。それに対して、「英語を使って仕事がしたい」「留学したい」という生徒の割合は低い。これは英語に自信がないというあらわれであろう。

同様に、新社会人対象のアンケートにおいても、社会で英語が使われているという認識は9割の人が持っているが、自分が英語を使うであろうという認識は低い。「日本の企業がグローバル化すべきだ」と思っているにもかかわらず、自ら海外で働きたいと思う人は少ない。理由はやはり、自分の語学力に自信がないからである。

3. 新学習指導要領の原理

目指すべき資質・能力は知識・技能を通して、思考力・判断力・表現力等を養うことであり、授業ではそのための言語活動を行うべきである。

アクティブ・ラーニングということばの代わりに「自主的、対話的学びを通して深い学び」を使用している。具体的には発見学習、問題解決学習、体験学習、調査、学習等が含まれるが、教室内のグループディスカッション、ディベート、グループワークなども有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

上記を実現するための方策として、小学校における英語の教科化があげられる。その背景には、現在行われている外国語活動に対して生徒、教師ともに積極的、肯定的評価をしているにも関わらず、小学校と中学校の接続がうまく機能していないことがある。それを解消するために、小学校3、4年生で体験学習、5、6年生で知識へとつなげる。ただし、知識を独立して教えるのではなく、言語活動の中で身につけさせなければならない。「知識とは体験の先にあるもの」という認識を持つ必要がある。

そして小中接続がうまくいったその先には、公立高校入試での4技能化が行われることも見込まれる。次期学習指導要領では小学校から高校まですべてCan-Doを設定している。

4. 中高の英語教育の現状

・中学校

英検3級の取得率は36.1%であるが、文部科学省の目標は今年度中に50%を達成することである。教員の英検準1級取得率は上昇を続け現在32.0%であった。都道府県別では北陸、四国が高く、特に福井県は2年連続で首位であった。英語で授業を行っている教師の割合は上昇を続け、60%強であった。

・高校

英検準2級の取得率は36.4%で今年度の目標は50%を達成することである。教員の英検準1級取得率は急上昇を続け現在62.2%であった。今年度内の75%目標に近づいている。英語で授業を行っている教員の平均割合は47.2%であった。

どのような活動を行っているのかという調査を行ったところ、音読、発音練習、文法説明、本文Q&A、などが80%~90%以上であったが、これらはすべてアクティブ・ラーニングではない。そして、アクティブ・ラーニングを促す要約活動、初見の英語を読む活動、スピーチやプレゼンテーションなどは30%かそれ以下となっている。この状況は中学校でもまったく同じであり、これは問題である。つまり英語で授業をやったところで、アクティブ・ラーニングにつながる活動をやらなければ、生徒の英語力は上がらないことを認識すべきである。

5. 学習指導要領に見る英語教育目標

現行でも「4技能を有機的に関連付けつつ総合的に指導する」ことは明記されており、新学習指導要領でもそれは変わらない。新学習指導要領ではCan-Doを目標に設定し思考力、判断力、表現力を養う。話すことは「やりとり」と「発表」の2つに分けている。CEFRでは中学校での目標は主にA1（英検3級相当）レベル、高校ではB1（英検2級相当）としてCan-Doを作成。去年は準1級、1級の受験が急増した。これは大学入試での外部検定導入が急速に進んでいるからであろう。

指導要領では言語を使用する場面や言語の働きを具体的に明示している。例えば、「礼を言う」という思考力を養おうとするときに、When given a birthday present という場面を設定し、状況に応じてさまざまな表現を考えさせるといったプラグマティックな言語指導などが考えられる。しかし、今までのテストでは知識の部分しか問わず、一つの表現しか正しいとされなかった。今回はそこから離れたいたいという発想がある。

6. コミュニケーション中心の英語指導で入試に対応できるのか。

SELHiの取り組みから一番感じられたのは、最初大きな反発があったにも拘らず、最終的には英語科全員が英語で授業できるようになり、生徒も英語で授業を受けることに抵抗がなくなっていったということである。そしてGTECスコア、センター試験得点ともに、上位、中位、下位すべての学校で、同レベルのSELHiではない学校より上昇が確認された。よって、スピーチ、ディベート、プレゼン等を積極的に行う英語教育が優れていることが実証された。

7. 大学入試改革

基礎学力テストの狙いは、教師に対する授業のフィードバック、授業改善が目的であり、直接入試とは関係ない。コンセプトは中学校の学力テストと同じである。「大学入試希望者学力評価テスト（仮）」が現在のセンター試験に相当するもの。学習指導要領で挙げられているものが身につけているかを確認するものであり「高等学校出口試験」ともいえるものである。各大学のアドミッションポリシーに合う生徒を求めるテストは、各大学における個別選抜で行われる。

8. TEAP-CBTについて

CBTにすることによって技能統合のさまざまな問題を出題できるようになった。Speakingは30分間実施。Writingは5問で統合問題を増加。入試後に必要となる実践的な能力を測定できる。TEAPが他の試験と違うのはCEFRがベースにありそれをテストにした点。Cambridge英語検定もその性質であるが、TOEFLは違う。

TEAPをセンター試験のスコアの相関性を検証したところ、センター試験では天井効果が表れ、英語力のある生徒の力が測れていないことがわかった。TOEFL ITP、またiBTとの相関性もかなり高い。

上智大学では、一つのテストで入学後のPlacement test、国際教養学部受講資格、国内大学院入試、留学、就職とすべて対応できるようにしようとしている。

質疑応答

Q「タイピングについては指導要領で入っていないが、CBTでよいのか。」

A「情報の教科で習っている。TEAPについて現在はCBTとPBT両方やっているが、今後はCBT



- へシフトする予定。英検の CBT 化も進めている。」
- Q 「指導要領が function を重視していくことだが、教科書もそう変わっていくのか。現在の授業時間数とクラスサイズは困難であるが、どのように考えているか。」
- A 「コミュニケーション英語という名前が悪い。新学習指導要領では『英語コミュニケーション』にした。英語表現は『論理表現』に変えた。教科の名前を変えて中身も変えることを目指す。教科書会社は売れる教科書を作る。売れる教科書とは慣れている教科書。つまり古い教科書ということになるので危惧している。授業時間数とクラスサイズは議論されていない。唯一されているのは小学校英語のみ。」

講演 2

午後より、藤田保・上智大学言語教育研究センター教授・副センター長より「主体的・対話的で深い学びを実現する英語授業」と題し、講演が行われた。

先の吉田先生の講演より具体的な内容で、アクティブ・ラーニングの中心に話をしたい。

1. 新学習指導要領について

先日発表された新学習指導要領について、リスニングの部分を取り上げて考えてみたい。そうすることで新学習指導要領の考え方、狙いが見えてくる。今回、小学校 3-4 年生、5-6 年生、中学校の各目標が示された。小学校では「身近なこと」、中学校では「社会的なこと」が理解できる、という目標が示されており、かつ、各年代の連動する形式で設定されている。つまり新学習指導要領では、教える側としては、生徒が今までどの様な学習をしてきたのか、また、今後どの様な学習をしていくのか、ということ意識しながら、今、どの様なことを教えていくかを考える必要がある。従って新学習指導要領では、生徒が着実に学習内容を習得できるよう、次の学年への「接続」に留意し、全体の流れを意識しながら各段階で教えていくことが大変重要視されている。

2. TEAP 採用状況

TEAP を入学試験に採用している大学について、昨年 5 月時点では 36 大学だったが、翌月の調査では 57 大学に、今年度 4 月の調査では 70 大学にまで増加している。国公立大学を含め偏差値の上位を占める大学では、ほぼ TEAP を採用している（私立大学では慶應義塾大学、同志社大学が未採用）。2030 年、「現在の中学三年生が 30 歳前後、今の小中学生が社会に出て働き始める頃に、彼らがその時の社会で対応できるか」を念頭に教育改革を行ってきた。15 年前と現在を対比してみても、例えば駅の改札や ATM に見られるように、自動化され人の手が不要になった職業がいくつもある。今後益々機械化が進み、現存する職業が無くなることは現実として予測される。教員も同様に、単に知識を与えて採点するのであれば不要になる。そうではなく、教師の役割をどう考えていくのか。大事なことは、21 世紀に生まれ、生きていく子どもたちに、20 世紀に生まれ生きてきた私達が「これまではこうだったから」という理由でこれまでの経験を基に教えていってはいけない、という事である。VUCA WORLD（＝将来を見通すことが困難で正解のない世界）で、自分の頭で考え判断し行動することができなければ生きていけない。だからこそ思考力、対話力、表現力が大切なのである。

アクティブ・ラーニングは 5 年ほど前から提唱されているが、英語だけでなく、どの教科も主体的・対話的な学びが必要で、他教科でその「型」が備わり、育てれば英語科は「言葉」を足せばよいだけである。そのためには学校全体で意識的に取り組む事が肝要である。

3. アクティブ・ラーニングの実践例

90 年代に私が大学教員になった頃、学生から集計したアンケートに「先生って楽な商売ですね」という声があった。当時どのような授業をしていたかといえば、リーディングの授業で、ペンギンブックスのテキストを「行動」「描写」「心情」の 3 つに分類し、色分けしてラインを引きながら読んでいく訓練をしていた。クラスを「行動」「描写」「心情」の 3 つのグループに分け、「行動」のグループは「行動」に該当する文を探し、更にその文に「Who visited Nasrudin?」などの問いを作っていく。その他のグループも同様に行のだが、問いを作っていく中でディスカッションが生じ、最終的に問いに対する回答、まとめを文章で書き表す。すると 4 技能を網羅的に駆使し、鍛えることになり、理解も深まる。教師はせいぜい時間配分に気をつけながら指示を出す程度。すると、当時の学生には一般的に「授業とは先生が話をし、生徒は黙って聞くもの」という根強い意識があるため、「先生は何も教えてくれない」「先生って楽な商売ですね」という発想が出てくる。昔は「先生」から「教わる」ものだったが、「自分で」「学ぶ」ものへと変化した。英語を使えるようになりたかったら英語を使わないといけない。授業を、生徒が英語に触れ、英語を使う実践の場とし、その中で生徒が知りたい、と思ったときに文法を教えれば、「文法＝つまらないもの」とはならない。

※ここで、山本永年・市川中学高等学校英語科教諭の授業の様子が映像で紹介された。アンケートでは「このような実践例をもっと紹介してほしい」「大変励みになり、刺激になった」といった意見があ



り、参加者の関心と評価が高かった。

最後になるが、アクティブ・ラーニングの評価方法については、例えば普段の授業内のパフォーマンス（発言等積極的な参加の姿勢）も評価対象に入れ、ペーパーテストとの比率も 50%ずつ偏りの無いようにすれば、生徒も主体的に取り組むのではないかと考える。

ワークショップ

文部科学省推進事業「英語教育推進リーダー中央研修」平成 28 年度受講者の先生方の指導によるワークショップが行われた。本研修会で同受講者によるワークショップを実施するのは前年度から引き続いて 2 回目。今回の内容は「Vocabulary」「Classroom English」で前回とは違う内容で行われた。

Vocabulary

語彙指導の方法として、Visualisation, Mind Map, Example sentences など具体的な活動内容が紹介された。参加者が生徒役となり、英語で行う英語のコミュニケーションを重視した授業を体験した。

Classroom English

英語で授業を行う際に、どのような点に注意し、どのような表現を使えばよいかということケーススタディで学んだ。参加者がペアやグループで解決方法を話し合い、共有するというアクティブ・ラーニングの手法が用いられており、活発に意見が出された。

ワークショップ後の意見交換会では、英語だけで授業を行うことについての是非についての質問があった。教師が英語を使うことは重要だが、文法説明や複雑な内容の説明は日本語で行う方がよいという意見や、基本的に英語を用いて授業を行っている、たまに日本語で説明した時に生徒の集中力高まりやすいという意見が出された。

閉会式

山崎吉朗・当研究所主任研究員より総括があった。

まず、開会から閉会まで講演を挟み参加いただいた藤田保先生と、熱心に参加して頂いた受講者にお礼を申し上げたい。最初の講演の時に吉田先生が感謝をどのように表現するかを問いかけた時に、すぐにみなさんから次々と異なった表現が出てきたのはたいへんよかった。普段も実践なさっているかと推察する。ワークショップでは先生方に生徒の立場になって頂いた。難しくないことばでどのように指示すれば生徒主体の授業になるかを学ぶことが出来たら幸いである。



私学の教員が「英語教育推進リーダー中央研修」に参加して今年が 3 年目。一昨年 of 研究所の調査資料集は「英語教育推進リーダー中央研修」に参加した先生方に寄稿を頂き、研修の具体的な内容、研修内容を取り込んだ具体的な授業実践例がぎっしりつまっている。是非手に取ってほしいと案内。また、今後の研修について参加を案内し、これからも良い研修会を行っていきたいと述べた。参加された先生方には仲間を増やして、英語科だけでなく学校全体を変えていく意識で頑張ってもらいたいと締めくくった。

◆都道府県別参加申込者数◆

No.	都道府県名	参加申込数	No.	都道府県名	参加申込数	No.	都道府県名	参加申込数
1	北海道	1	17	石川	0	33	岡山	1
2	青森	1	18	福井	1	34	広島	0
3	岩手	0	19	山梨	0	35	山口	0
4	宮城	5	20	長野	0	36	徳島	0
5	秋田	0	21	岐阜	0	37	香川	0
6	山形	0	22	静岡	1	38	愛媛	0
7	福島	1	23	愛知	4	39	高知	2
8	新潟	2	24	三重	0	40	福岡	0
9	茨城	2	25	滋賀	0	41	佐賀	0
10	栃木	1	26	京都	0	42	長崎	0
11	群馬	2	27	大阪	4	43	熊本	0
12	埼玉	0	28	兵庫	0	44	大分	0
13	千葉	6	29	奈良	0	45	宮崎	0
14	神奈川	3	30	和歌山	0	46	鹿児島	0
15	東京	19	31	鳥取	0	47	沖縄	2
16	富山	1	32	島根	0			
							計	59

◆アンケート結果◆ 回収率95% (56名/59名)

●問 当研修会への参加目的をお書き下さい。

- ・新学習指導要領で求められる、これからの英語教育について知るため。また、それを実践する上で役に立つ技術をワークショップで学ぶため。
- ・新指導要領に対する吉田先生の見解を直接確認するため。
- ・ディープ・アクティブ・ラーニングへのヒントを得るため。
- ・4技能型授業の行い方について知りたかった。

●問 当研修会の各プログラム・内容等について、参考になった点、感想、意見等をお書き下さい。

○講演1【吉田研作氏】

- ・大学受験がどのように変わるのか、それによって高校はどう変わらなければならないかが明確に分かった。
- ・大変モチベーションが上がった。今までの文科省の取り組みの歴史が、明確に理解でき、これからの入試に向けて、そして社会人になっても英語が武器になるようより深い教育をしたく思った。
- ・今後の方向性が見えてきたということ、現状の課題が何で、求められているものが分かったこと、また外部試験の比較で見えるものがデータ化されていたことなど新たな発見が多くありとても有意義な時間だった。
- ・学習指導要領で求められていることはコミュニケーション重視と頭に入れて授業をしているが、本日の講演を聴き、英語を使ってはいるものの知識・技能中心の授業から抜けることができていることがよく分かった。文法が理解できていなければ正しく使えない、自分がそれで苦労したという思いから知識→体験の授業を展開していたが、その方法を次の授業から見直そうと思う。

○講演2【藤田保氏】

- ・なぜこの入試改革が行われているのか、分かり易く説明していただき、我々先生方の新しい役割について深く考えさせられた。
- ・新しいアイデアが次々と浮かんでくる講演だったので早速試してみたいと思った。非常に分かり易く面白かった。
- ・午前の吉田先生のお話を受けて、さらに「深い学び」が準備されており、有益だった。こうした研修を受けさせていただくたびに教師はファシリテーターなのだ実感する。来週の授業からできる小さな実践からでも取り入れさせていただこうと思う。藤田先生の実践例のみならず山本先生の実践例もいただけたことがありがたかった。
- ・学びの3要素の具体例が、非常に分かり易く、参考になった。道具としての英語を、目的に応じて使いこなせる小学生、中学生を育てられるように、カリキュラム研究に活かしていきたい。

○ワークショップ

- ・英語で英語を教える事の有用性とその有効な運用法を多く学ぶことができた。英語の指示はシンプルに、クリアに、今後に向けての問題も明らかになり、解決していきたいと思う。
- ・新出単語をどのように覚えさせるのか知ることができたのでぜひ使ってみたいと思う。
- ・これまでの指導法に固執せずに、新たに取り入れることの重要性、また教員も間違いを恐れず英語で発信していくことの大切さを改めて気づかせてもらった。
- ・Classroom Englishのセッションでは、普段自分が行っている指示の足りない点や誤りに気づくことができ大変勉強になった。

●本年度秋以降の当研修会への要望等をお書き下さい。(例：研修会で取り上げてほしいテーマ、課題、実施してほしいプログラム、継続もしくは改善を望む事項、来年度以降の開催時期等)併せて、当研究所の研修事業等に対するご意見がありましたらお書き下さい。

- ・非常に良い研修だが、時間、費用の面で多くの教員が参加するのが難しいところがある。費用を下げて、多くの教員が参加できるようになると助かる。
- ・教科主任という立場上、組織のマネジメントの成功例、バラバラの方向を向いている教員をいかに一致団結させるか学びたいと思う。
- ・ICTが教員の負担を削減し、生徒と向き合える時間を増やせるか？どのような効果的かつ安価な方法があるのか？スペリングとかはチェックできて採点できるのでは？
- ・授業の様子を拝見できとても良かった。これからも他校の先生の授業の実践例を見ていきたい。